

## グラント先生を悼んで

太 田 幹 雄

薄暗くてひっそりとした学館（当時は神学館の前にあった）の食堂で、私たちはグラント先生をお迎えしました。集まった学生は十人もいたでしょうが、上野直蔵先生が英文で歓迎の辞を述べられ、グラント先生は緊張しきった面持で聞いておられました。場所は食堂でしたが、飲食するものは何一つありませんでした。

いよいよ授業が始まり、先生お得意の John Steinbeck の話になりましたが、学校には読む本がほとんどなかったのです。「本を探しに行くから、ついて来なさい」と、先生はある日言われました。行き先は図書室でもなく、本屋でもなく、おどろいたことには、星条旗はためく占領軍司令部（烏丸四条の大建ビル）でした。MPの案内でグラント先生と私はビルの何階かに上って行った。学者風な背広姿のアメリカ人が先生をさかんにボブ、ボブと言って迎えたことを憶えています。Bob が Robert の親称なることを知ったのは後のこと。ここで私たちは John Steinbeck の本をもらいました。本といっても兵隊用 (Armed Forces Edition) の紙表紙文庫でしたが、私たちの喜びはたいへんなものでした。

作家の阿部知二、いや阿部先生（「英国小説論」を教えられた）の短篇『おぼろ夜』（昭24）に出て来るアメリカ人教師は、どうもグラント先生に似ていると、誰ともなく言い出した。しかし阿部先生は「私の仮構の産物とみとめて下さい」と、わざわざ断られています。グラント先生を慕うあまり、つい余計な想像をする人もいたのです。

その後、私は先生と同志社女子中高で共に教え、学生時代にもまして、

懇切な御指導をたまわりました。Masefield の詩などを一緒に読んだ日もありました。すし屋でお酒のおつき合いをした日もありました。御宅のパーティに招いて下さったり、アメリカ留学のお世話をして下さいました。英文科での勉強会にさそって下さったり、私は身に余る御恩を受けました。英文科における先生の最初の「教え子」の一人として、何一つ御恩に報いることなく、ただただ慙愧にたえません。語りたいことは尽きませんが、ここに先生との思い出の片鱗を記して、心から悼み悲しむ次第です。

## グラント先生のこと

高 山 修

たしか四年生の後期頃だったから昭和26年の秋のことだと思う。グラント先生から同級の北垣宗治氏と私とに毎週一回先生宅で会合をやるので加わらないかとの誘いがあった。どんな集りなのか、どんなメンバーなのか、くわしいことはわからないままに決められた日時に飛鳥井町のお宅を訪れた。

最初のメンバーが誰々であったかについては記憶さだかではないが、その後二年間ほど続いたこの会合には、北垣氏と私のほかに、金関寿夫、宮井敏、斎藤勇、浅田美代子、岩山郁代、山田時子、大下道の諸氏が出席されていた。ほとんどの場合は夕食後に集まって9時頃に終るのであったけれど、時には夕食を御馳走になったり、また話がはずめば終るのが10時をすぎることもあった。

この会合は決められた方式でおこなわれたわけではなく、さまざまなことが試みられた。メンバーの誰かがあるトピックに関して introductory talk をやったあとで皆で話しあうとか、決められた作品（主として詩や短